

ノイエスだより

ノイエス朝日(朝日印刷工業株式会社)
群馬県前橋市元総社町七三―五
TEL 027・2555・3434
FAX 027・2555・3435
http://www.neues-asahi.jp

梅雨が明けました。去年は八月までジメジメとしていましたが、今年はすつきり夏らしい夏休みが始まりそうです。小中学校の夏休みと一緒にオリンピックも始まります。今回のオリンピックはいつもに増して賛否ある中で開催となりますが、先日テレビでスポーツコメンテーターや指導者として活躍している為末大氏が、そもそも多様性を認めるということは別意見が存在するというのが当然で、オリンピック内だけではなく、オリンピックに反対の方ももちろんいて、その多様性も認めていかないと…というようなことを話していました。多様性とは難しいもので、自分とは違う意見の存在を知り、さらに共存していくというのは大変なことだと思います。どうしても違うものは否定したくなる、排除したくなるということで争いに発展してしまうのだと思います。歴史上の争いも同じような価値観で生活している集団同士を囲うボーダーを引く、ボーダーを超えるといったことが原因だったのではないのでしょうかそうすると、同じ価値観を他者に認めさせるための闘いや、仲間を守るための闘いなどという大義名分もでてきたりします。この大義名分もやっかいで、どの立場に立っているかで相反するものが乱立するので、一概に正義も語れないような気がします。

学生の頃、ガールスカウトの「デイベート」で公的な主題について異なる立場に分かれ議論して、時間で区切って逆の立場になって逆の意見を主張するという体験をしました。例えばアメリカではこういった授業が活発に行われてきたようで、反対意見があることは当然の中で自分の意見をいかに通すかという理屈をどんだん主張していきます。その積極性がいわゆる日本的な和の気質と合わないような気がして、私個人としてあまり好きではなかったのですが、結果が離散ではないことを前提としてお互いの意見をぶつけ合うことは、より良い前向きな未来を導く可能性があることも知りました。

反する立場に立つてみると、そこにはそれなりの理由もあることがわかります。アートに関わる方は多様性を認めるという方が多いと感じるのですが、おそらく芸術には表現する側にも鑑賞者にも、「共感」や「空間を読む」「背景を感じる」といった感性を大切にすることが多いので、必然的に「デイベート訓練」をしているのかもしれない。ノイエスでも絵画や彫刻、工芸から現代アートまで様々な展示をしています。違う分野の表現者や愛好家が予想以上に理解し合って仲を深めていくという場を何度も共有しました。ある意味、多様性が共存する場所を体感できているのではないのでしょうか。

為末氏の言うオリンピックの外の多様性も認めるとは、そういったことなのだと思えます。オリンピックが終わるころには終戦七六年を迎えます。争いや否定を招くのではなく、より良い共存のために様々な意見を自由に発言することができる社会が実現し、続くことを願います。

(橋本)

ノイエス朝日〈展覧会〉のご案内

※入口で体温と体調とご連絡先を記入していただいています。
マスク着用と手指の消毒も引き続きお願いいたします。

第5回 楯円展

Session さま 1112 〈企画〉

会期 七月二十四日(土)～八月一日(日)

午前十時～午後五時

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

出品者

上杉一 掛川孝夫 河内世紀一 小林正 酒井重良
住谷夢幻 萩原敏孝 平野裕明 福島保典 真下京子

第56回 自由美術群馬展

会期 八月六日(金)～十日(火)

午前十時～午後五時三〇分

会場 ノイエス朝日 スペース1・2 (最終日は午後五時まで)

出品者

【平面】 新井富美子 有村真織(遺作) 石井克 大木政子
倉田章子 桑原康枝 小暮芳宏 児玉寿美子 小林活夫
小用キヨシ 須田良雄 多胡宏 田島和雄 手島まき子
長門ふみ子 中林三恵 疋田由利子 山岸千冬
【立体】 吉田光正

主催：自由美術群馬研究会

後援：上毛新聞社 群馬テレビ 群馬芸術文化協会
問い合わせ先：事務局 多胡宏 ☎027-269-3585

第9回 勝手気ままなアーチスト四人展

— 広瀬毅郎・広瀬達郎・三井田みゆ・広瀬多音^{たお} —

会期 八月二十日(金)～二十六日(木)

午前十時～午後五時

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

問い合わせ先：広瀬 027-323-4947

飯出製袋市

暮らしの挽物工芸展

木に支えられ

〈企画〉

会期 八月二十八日(土)～九月五日(日)

午前十時～午後五時

会場 ノイエス朝日 スペース1・2



飯出製袋市氏の作品は、暮らしに寄り添う形の使いやすさと美しさ、その汎用的な形の奥に、長年の技術と経験から自然と醸し出される木目の美しさや重さや微妙な湾曲といった目に見えない「個性」が宿っています。十年も毎日使い続けている飯出氏の汁椀も、途中で塗りなおし愛着をもって生活にとけ込んでいます。コロナ禍で自宅での食が見直されていますが、日用品も地球と身体に優しいもの、美しいものを使ってみるという贅沢な楽しみ方をしてみてはいかがでしょうか。